王人
OHBITO
Ohbito
2
神田哲也
TETSUYA KANDA

ヤン
アランの父親で、救国の英雄。現在はレイナル領の領主を務める。
ヴィルホ
元傭兵。その強さと厳しさから、「レイナル領の鬼将軍」と呼ばれる。
アルティリエ
樹霊族（エルフ）の女性。アランに精霊樹の森の異変を告げる。
ラス
高い知能と身体能力を持つ巨狼。風の術を得意とし、空を駆ける。
アラン・ファー・レイナル
異世界に転生した本編の主人公で、現在十五歳。触れた者を覚醒させる「他者強化能力」を持つ。
ミミラトル
レイナル領一帯を統治する女神。子供の魂であるミミアに肉体を譲り、自らは神界に戻った。
フィアス
アランの妹。気の強そうな瞳が特徴。我の強い性格だが、非常に兄想い。
グイ
谷底でアランに救われたゴブリン。アランの力で本来の姿に戻る。

主な登場人物

第一章

俺がアラン・ファー・レイナルとしてこの異世界に転生し、十五歳になった春先のある日。
俺は、レイナル城内にある父・ヤンの執務室の入り口に立っていた。
レイナル城は俺達家族が暮らす城で、父はレイナル領の領主なのだ。
執務室の中では父が、警備隊隊長のヴィルホさんと話し合っている。
「盗賊？」
「ああ、最近頻繁（ひんぱん）に出るらしい。このレイナル領と首都ダオスタを結ぶ、谷間の山道にな。あの辺りはレイナル領じゃなく隣のドンバン領になるんだが、狙われているのはダオスタへ運ばれる『虹石（にじいし）』だ。それに、どうやらゴブリンなんかも出没するようになってるらしい。無視できる問題じゃねえし、一度ダオスタへの物資輸送隊に同行する必要があるんじゃねえかと思ってよ」
「なるほどな……」
俺は立ったまま、長引きそうな二人の話を聞いていた。ちなみに虹石というのは虹のようにカラ

フルで美しい鉱石のことだ。もともとは俺が領内のとある洞窟で偶然見つけたものを、ネックレスにして妹のフィアスに誕生日プレゼントとして贈ったのだが、その美しさに魅了された貴族達の間で大変な人気となり、今ではレイナル領が誇る名産品になっている。

「それで、被害は？」

父がヴィルホさんに聞く。

「ダオスタ側の輸送隊にけっこう出てるようだ。虹石もかなり奪われちまってるらしい。レイナル領側の輸送隊には、今のところ被害はない。ま、盗賊が出没する地点は、レイナル領輸送隊からダオスタ輸送隊に物資を引き渡した後だから当たり前だが」

「そうか……。確かに、一度我々が同行したほうがいいかもしれんな」

「ああ」

「次の虹石の輸送はいつだ？」

「……十日後だ」

「よし、その時に俺達も輸送隊に加わろう」

「わかった。……だがよ、襲撃してくる盗賊どもを撃退することはできるだろうが、おそらく捕まえるのは無理だぞ」

ヴィルホさんの言葉に、父が間を置かず答える。

「別働隊がいれば、話は別だ」

「別働隊？」

「そうだ。襲撃される地点は決まってるんだろ？　だったら別働隊を配備して挟み撃ちにすりゃいい。……で、盗賊の人数はわかってるのか？」

「二十人前後だと聞いてる。だがその別働隊、誰が率いるんだ？」

「そうだな……」

所在なく立っていた俺に、父が視線を向ける。

「アラン」

「はい」

真剣な雰囲気だったので、つい固い声で返事をしてしまう。

そんな俺に父は告げた。

「お前ももう大人だ。手伝ってもらうぞ」

†

――輸送隊出発の日。

俺は革製の防具を身に着け、背には長剣を負っている。

厚い革を何枚か重ねて作られた胸当てと籠手（こて）、膝（ひざ）まであるブーツ、腰には薬草とラスを呼ぶ犬笛、

それに五本のスローイングナイフを下げていた。巨狼のラスは大きくて目立ちすぎるから連れていくことはできないが、念のため犬笛だけは持っていくことにした。

腰丈のマントのフードを被れば、俺はどこぞの暗殺者といった風体である。

それもそのはず、俺に与えられた任務は別働隊を率いて、輸送隊を狙っている盗賊を背後から奇襲することだからだ。敵に気づかれないよう、目立たず、かつ身軽な装備でなければならない。

そろそろ出発の時間だ。

俺が率いる別働隊は、父とヴィルホさんが護衛する輸送隊より少し先にレイナル城を発つことになっていた。輸送隊を待ち伏せているであろう盗賊達を見つけ、監視して、いつでも奇襲できるよう備えておくためだ。

隊員は猫人と犬人、計二十名。皆、俺と同じような装備である。

今回の任務では整備された道ではなく山や森の獣道をひたすら進むことになるため、一般的な人間に比べて身体能力が高く、五感の優れている者が選ばれた。

猫人部隊のリーダーはダーナさん、そして犬人部隊のリーダーはペトリさんだ。

ペトリさんは大きな垂れ耳とふさふさの尻尾を持つ犬人の男性で、顔立ちは人間とほとんど変わらない。

三十歳の彼は最近子供が生まれ、毎日とても充実しているそうだ。この任務を終えたらしばらく妻子とゆっくり過ごしたいと言っていたが、俺にはそれが死亡フラグな気がしてならず、握手ついでに俺の能力――触れた相手の力を強化する特殊能力――を使っておいた。

犬人にはコボルト族と犬人族がいる。小柄で顔がまんま犬なのがコボルト族で、人間に似た外見ながらも耳だけ犬の垂れ耳を持つのが犬人族。いずれも男性種族である。

一昨年結婚したダーナさんは、居残り組である夫の元近衛騎士団兵・セアドさんと熱い抱擁を交わしているところだ。二人とも、周囲からのからかいの声にもまったく動じていない。結婚当初は手をつないでいるところを皆にからかわれるだけで動揺していたのに……変われば変わるものである。

「よし！　それでは行こう！」

セアドさんとの抱擁を終えたダーナさんが号令をかけたが、実はダーナさん待ちだったことは皆黙っていた。

†

「明日は山に入りますね」

出発して二日目の夜、一緒に焚火を囲んでいたペトリさんが言った。

「そうですね、あの山を越えたらドンバン領です。そこからは獣のサポートもないから、ゆっくり過ごせる夜もこれで終わりかな。それに、明日からはこうして火を起こすこともできませんから」

「そうだニャ。アランのお蔭で今も獣が見張ってくれてるが、明日からはそうはいかニャいんだろうニャ」
「父達の輸送隊も今はゆっくり過ごしているみたいです。あと、明日は少しペースを上げたほうがいいかもしれません」
俺は手元にある小さな紙片を見ながら二人に伝えた。
俺の左肩にはその紙片を運んできてくれた真紅のオウムが止まっている。こいつの名前はポータだ。
このポータ、以前俺が能力を使った鳥で、人の声を完璧に再現できる特技を持っている。いつの間にか鳥の弱点である鳥目を克服していて、今では普通に闇夜の中を飛び回ることができ、俺達家族の伝達役を一手に引き受けてくれているのだ。少々忘れっぽいのが玉に瑕だが。
周囲を見渡す。
小さな兎は耳を立てて辺りの音を探り、狼は鼻をヒクヒク動かして匂いを嗅ぎとっていた。頭上には蝙蝠が飛んでいる。おそらく超音波で周辺に異常がないか確認しているのだろう。また、少し離れた茂みでは、蛇が温度を感知して警戒を行っていた。皆、俺達のために働いてくれている。
彼らは皆、かつて俺が能力を使った獣達だ。
明日はいよいよレイナル領の外に出る。そうなると、危険も増えるだろう。
盗賊だけでなく、ゴブリンも出没するという話だ。他にも、もしかしたらオークなんかも出てくるかもしれない。
俺が頼めば、獣達はきっとレイナル領の外にもついてきてくれる。だがこの先の危険な旅に、彼らを巻き込みたくなかった。
「それにしても、アラン様は不思議な方ですね。こんなにも獣に好かれるなんて。そのうえ、剣や法術にも精通しているとか、すごすぎですよ」
「うん。さすが、あのヤン様とマリア様の子供だニャ」
「あはは。そう言ってもらえるのはありがたいんですが、俺なんか両親には遠く及ばないですよ」
これは本当のことだ。俺は武芸や法術において、まだまだ両親には及ばない。
剣や体術では、父に軽くあしらわれている。先日も手合わせをしたのだが、父を疲れさせることすらできなかった。終わった後、俺は汗だくで倒れてしまったのに、だ。
法術では母の知識にまったく追いつけない。法術の話をしても、母が何を言っているのかわからないことが多々ある。
いや、俺も努力はしているんだ。
剣術も法術も、毎日欠かさずに磨いている。
それにもかかわらず、両親に追いつく自分がイメージできない。
俺の力によって、二人の能力が引き上げられているせいなんだろうけどね……。
「いやいや、我々だってアラン様には及びませんよ」

「む？　そうか？　私やセアドは、アランと結構いい勝負するぞ？」
「あんた達はな。俺からすりゃ、あんたやセアドさんだって大概ですよ、まったく」
ダーナさんが言ったように、俺、ダーナさん、そしてセアドさんの実力は優劣つけがたい。
スピード型のダーナさん。パワー型のセアドさん。そしてバランス型の俺。
三人で訓練すると、お互いの長所、短所を認識しやすい。効果的なのだ。
だが俺達は普通の兵士と比べて実力が突出しているわけではない。俺達の強さはまだ常識の範囲内だ。
「ていうか、そんなアラン様が遠く及ばないって、ヤン様はどんな化け物なんですか」
「いや、うん……」
「……そうだニャ」
「そういえば、アラン様、ダーナ、セアドの三人対ヤン様で手合わせして、ヤン様一人に手も足も出なかったっていう噂は本当なんですか？」
「……そんなこともありましたね」
「……あったニャあ」
「……本当だったんですね」
遠い目をして答える俺とダーナさんを見て、ペトリさんが呟いた。
その後も、そんな父といい勝負するヴィルホさんもまた化け物だとか、ヤン様が世界一強くても世界一可愛いのはうちの子だとか（ペトリさん）、いや、うちの夫は世界一の働き者だとか（ダーナさん）、話はよくわからない方向に転がっていき、他のメンバーも交えつつ談笑した。
そんな和やかな雰囲気とともに、森の夜は静かに過ぎていった。

山を越え、レイナル領からドンバン領に入った。
景色がいきなり変わるということはなかったが、レイナル領とは空気が違うのがすぐわかった。
レイナル領一帯は女神ミミラトル様――通称ミミ様――に統治されているが、このドンバン領は管轄外だ。そのためだろうか、うまく言い表せないが、もやもやと体に纏わりつく不快なものを俺は感じていた。
索敵の術を展開しながら慎重に谷間の道を目指す。獣達はすでに俺達のもとを去った。唯一、茶色い毛並みの狼が三匹、俺達につかず離れずついてきてくれている。俺ははじめ彼らにも引き返すよう伝えたのだが、元々行動範囲が広い彼らはドンバン領にもたびたび足を踏み入れていて慣れているようで、自発的についてきてくれた。
狼はやはりペトリさん達犬人と相性がいいらしい。ペトリさんらが時折近づいて頭を撫でたりするのだが、狼は嫌がりもしない。だがこれをダーナさんがやろうとすると牙を剥いて威嚇する。
涙目で「ニャ、ニャんでニャんだ!?」と抗議するダーナさんには気の毒だが、見ていて和む光景だった。

その日の昼前には、合流したダオスタ輸送隊に虹石やその他の物資が引き渡され、父とヴィルホさんはそのままダオスタ輸送隊に加わった。俺達別働隊はその光景を遠くから眺めていた。

そこからは俺達もさらに気を引き締め、慎重に歩を進める。だが幸いゴブリンや盗賊には遭遇(そうぐう)しなかった。

その夜は火もおこさず、各々(おのおの)が干し肉や硬いパンで空腹をしのぐ。

睡眠は三交代制だ。

火がないのでマントと毛布で体を温めるしかなく、日中と比べて格段に寒い夜を、身を寄せ合って過ごした。

そして夜が明ける。

今日は輸送隊が例の谷間の道を通過する。

この辺りまで来ると、どこに盗賊が潜んでいるかわからないため、隠密の得意なダーナさんを先頭にして山中を進む。俺も索敵の術を展開し、警戒を怠らない。

そして問題の場所のすぐそばまできた。

眼下の谷には狭い道が通っている。谷の下にはさらに落ち込んだ崖があるが、どれほどの深さなのか見当もつかない。あの下には川が流れているのだと、先日ヴィルホさんは言っていた。こんな場所で襲撃されれば、輸送隊も荷を守ることは難しいだろう。

やがて、俺の索敵の術に反応があった。

それは谷間の道に意識を向けている、人間だった。

数は二十一。

ダーナさんが手を上げ、俺達は立ち止まる。

生い茂る木々の先、谷に続く斜面の途中に、盗賊達がいるのだ。

父とヴィルホさんが同行する輸送隊がこの谷間を通るまで、まだ時間がある。

俺は集中して他にも盗賊の気配がないか探ってみたが、少なくとも半径五百メートル以内に反応はなかった。連絡役などを置いているものと思っていたが、違うらしい。

それからさらに時間が経った。

日は西に傾き始めている。

「輸送隊はまだ来ないのかな」

「……もうそろそろだと思うがニャ」

俺達はじっとその場に待機していた。

盗賊達は緊張感のない様子で、五十メートル近く離れたここまでもかすかに聞こえる大きな声でお喋りしている。

「奴ら、緊張感がニャいニャ」

「ええ。大した奴らではなさそうですね」

その様子を見る限り、少なくとも訓練を積んだ軍人くずれなどではなさそうだ。

ダーナさんと並んで、茂みの向こうにいる盗賊に意識を向け続ける。
二十メートルほど先では、ダーナさんの部下の猫人が彼らを見張っていた。
「……！　動きがあった」
前線の猫人がダーナさんに合図を送ってきた。
盗賊達の動きが慌ただしくなったようだ。
どうやら盗賊は双眼鏡で輸送隊の姿を見つけたらしい。さきほどまでと違い、急に辺りに緊張感が漂い始めた。
やがて、谷間の道に輸送隊が現れた。
そして盗賊達がいるすぐ下の道に差しかかる。
荷のありかを見定めたのだろう。一人の盗賊の雄叫びのような号令で、崖の上から矢が放たれた。
盗賊の急襲に、輸送隊の動きが止まる。その機を逃さず、盗賊達は一気に崖を駆け下りた。
手に持つ鈍色の剣を振るうのに何の躊躇もない。
欲望が彼らを支配していた。
「行け行け行け！　あの荷台だ！　あれを落としちまえ！」
「オオオッ！」
ひときわ堅牢な荷台を引く二台の馬車。
その中に虹石があると睨んだのだろう、盗賊達はまっすぐその二台に向かっていく。

だが、二人の男が彼らの前に立ちはだかる。
一人は他の兵士に比べ軽装で、厚手の服の上に脛当てや籠手、胸当てを身に着けている。左手には一般的なものよりも小ぶりの盾、右手には頑丈そうな幅広の剣。不敵な笑みを浮かべて盗賊を迎え撃つのは、わが国の英雄ヤン・ファー・レイナル――俺の父である。
「腕の一本ぐらいは覚悟しろよ！」
父はそう言いながら剣の腹で盗賊を殴り飛ばす。
そして盗賊の行く手を阻むもう一人の人物は、その場の誰よりも大柄な男だ。太い腕と足、厚い体を金属の鎧で包んでおり、頭には二本の角が生えた兜を被り、手には身の丈を超える巨大な戦斧を持っている。彼は地面に柄を勢いよく叩きつけ、盗賊に向かって叫んだ。
「オラァ！　覚悟はできてんだろうな、小僧ども！」
その雄叫びに怯んだ盗賊は二人まとめて戦斧で薙ぎ払われた。その巨体と装備からは考えられない早技だ。
吹っ飛ばされた二人は背後の岩壁に激突し、その場に崩れ落ちた。
さすが「鬼将軍」ヴィルホさんだ。
レイナル城で普段行われている訓練の際、彼の怒声を聞くだけで兵士達は皆萎縮してしまう。今日はそこにたっぷりと殺気まで込められているのだ。あれには盗賊達だって立ち竦んでしまうだろう。

ヴィルホさんがどっかりと陣取って二台の馬車を守り、父が積極的に切り込んで攻める。
二人の圧倒的な強さに、盗賊の勢いは鈍化する。
「お、おいなんだよ、あいつら……」
崖の上の射手が困惑の声をあげる。
ほとんど一瞬で三人の仲間がやられてしまったのだ。無理もない。
弓を射る手が止まった彼らに、一人の盗賊が叫んだ。
「てめえら、手が止まってんぞ！　奴らはどうせこの崖を上ってくるこたあできねえんだ、しっかりやれや！」
立派な装備の大男だ。
熊のような巨体を重装備で固めたヴィルホさんに比べるとどうしても貧相に見えてしまうが、おそらく彼が盗賊の頭なのだろう。
その男の声を受けて盗賊達は慌てて弓を構え直した。
「あ、ああ！」
「す、すまねえ！」
「チッ！　あんなのが出張るなんて聞いてねえぞ！　楽な仕事じゃなかったのかよ！」
盗賊頭はイライラした様子で悪態をついている。
その視線の先には、今もまた彼の仲間を蹴散らしている二人の男の姿があった。

盗賊の意識は完全に谷間に向いている。
今だ。
俺の合図で、待機していた別働隊が一斉に行動を開始した。
矢を射っている盗賊は五人。
猫人五人の放ったナイフは正確に盗賊の弓の弦を捉え、これを切断した。
すでに弓を構えていた盗賊は力の行き場を失い、勢い余って矢が手から離れた。
ちょうど弦に指をかけようとしていた盗賊は何もない空間を引っ掻いた。
矢を取ろうと背中の矢筒に手を伸ばしていた盗賊は、弦が切れたことにすら気づかなかった。
「……何だっ!?　……な!?」
「な、弓がっ!?　……ぐぎゃ！」
「……ぐわっ!?」
そこに別の猫人が素早く接近し、盗賊達を組み伏せる。
作戦どおりだ。
――たとえ殺す気でかかってきても、決して相手を殺さないこと。
今回の作戦にあたって、俺は父にそう頼んだ。
理由を聞かれ、「盗賊達の背後関係を洗い出すため」と答えた。
今では虹石の流通と販売は国家――グラントラム王国政府の管轄事業となっている。その管理は

行き届いており、虹石一つ一つに個別の管理番号と刻印が与えられ、それらがないものは偽物と見なされる。そして偽物を扱った者は法律違反として罰せられるのだ。
だから盗賊達が虹石を手に入れても、そう簡単に売りさばくことはできないはずなのである。
虹石を買い取り、売りさばく。もしくは隣国に輸出する。盗賊の背後には、少なくともそうしたことができるだけの力、すなわち財力と人脈を持つ者がいる。そう考えるべきだろう。
俺のこの考えに父もヴィルホさんも納得し、むやみに盗賊達を殺さないと約束してくれた。
だが、「殺さないこと」に俺がこだわる本当の理由は別にある。
この世界では、人の命は軽い。
人が人の命を奪うという行為に対しての忌避感が希薄なのだ。
父にしてもそうで、戦争という特殊な事情があったとはいえ、いや、だからこそかもしれないが、人を殺すということを驚くほど簡単に考えている。
今回も、この国の法律では「盗賊は死罪」に当たるため、全員殺してしまえばいいと父は考えていた。
だが俺は死んだ人間がどんな状態になるのかを、この目で見て、知ってしまっている。
レイナル城裏の牢屋に留まっていた、元領主に搾取され殺された奴隷達の霊。彼らは深い悲しみと憎しみにより、命を失った後も苦しみ続けていた。
その苦しみがどれほどのものか、俺はそのあとミミ様に聞いた。霊体になってしまうと感覚が生

前の何倍も鋭くなるらしい。そのため、頭を割られて死んだ者は頭を割られた時以上の痛みに、腹を切り裂かれた者は切り裂かれた時の何倍もの痛みに苦しむことになる。苦しんで死んだ者は、その苦しみに苛まれ続け、成仏すらできない。終わりがないのだ。
今回、返り討ちに遭って殺されたら、盗賊達もおそらくそうなってしまうだろう。
俺は、少なくとも自分の手が届く範囲でそんな存在を生み出したくなかった。
だから、殺さない。
殺させない。
そう思った。
盗賊達は予想外の事態に対応できず、次々と無力化されていく。
状況を冷静に把握して態勢を立て直す余裕など、彼らにはなかった。
――だが。
「くそがっ！」
カンッ！　と甲高い音が響いた。
剣と剣がぶつかり合ったような音。
あの盗賊頭の男が、猫人隊員の投げたスローイングナイフを防いだのだ。
弓を射ていた五人の盗賊と同じように捕縛しようと盗賊頭に接近した隊員も、蹴りを食らって倒れた。

盗賊頭は辺りを見回し、俺と目が合った。
そして舌打ちし、こちらに向かってきたのだ。
「くっ！　アラン様！」
倒れた隊員が素早く立ち上がり、俺を守ろうと盗賊頭の前に立ちはだかった。
だが盗賊頭は剣を鋭く突き出して牽制しながら、隊員が後ずさった隙に懐から小袋を取り出し、中身を周囲にまき散らした。
白い粉のようなものがみるみる煙となり、辺りを覆う。
立ち込める白煙。
俺からは盗賊頭はもちろん、前方の隊員すら見えない。
今周囲にいるのは、俺と盗賊頭、隊員の三人を除いてダーナさんとペトリさんだけのはず。
他の隊員達は、父やヴィルホさんに倒された盗賊を捕縛するためすでに谷間に向かってしまった。
男が煙幕を張る直前、ダーナさんと、少し遅れてペトリさんが、盗賊頭の動きを見てこちらに駆け出すのが見えた。
しかしこの煙では視認できない。
「ぐわっ」
隊員の声。
くそっ！　やられたか。

俺は瞬時に剣を抜く。
その直後、盗賊頭が俺に接近して煙の中から姿を現した。
「餓鬼がっ！　どきやがれ！」
殺気を込めた声で盗賊頭が叫んだ。
だが、ヴィルホさんの雄叫びを訓練中ずっと耳にしていた俺にはどうということもない。
俺はその場を動かず、無言で盗賊頭を見据えた。
「チッ！　どかねえってんなら、死ねや！」
男が剣を振りかぶり、俺の脳天めがけ振り下ろす。
かなりの剣速だ。
咄嗟に剣を寝かせてそれを受ける。
手に衝撃が伝わり、体が一瞬痺れた。
「くそ！　こいつも下の奴らみてえな別格かよ！」
受け止められるとは思っていなかったのか、盗賊頭が悪態をつく。
だが手を止めることなく、執拗に俺の頭を狙って斬撃を繰り出してくる。
そのすべてを、俺は受けきった。
「くっ⁉」
思わず声が出る。

受けに回ったのは失敗だった。
剣の衝撃による痺れが収まる前に次の斬撃が来るため、身動きが取れないのだ。
盗賊頭の剣はふんばらなければ受け止めることはできず、受け流せるほど軽くもなかった。
背筋を嫌な汗が伝った。
「いい加減、壊れやがれ！」
一瞬、何を言っているのかわからなかったが、男の苛立った声ですぐに気づいた。
この男は初めから、俺ではなく剣を狙っていたのだ。
盗賊頭の剣はよく見れば俺のものより分厚く、俺の脳天を狙うふりをして正確に剣の一点を打ち続けていた。
幾度となく繰り返される斬撃。
ビキッ！
ついに限界がきた。
俺の剣の刃に食い込む相手の剣。勝利を確信した盗賊頭の顔が目に入る。
とどめを刺そうと、盗賊頭は一段と大きく振りかぶった。
次の一撃で俺の剣は砕け、そして、頭をかち割られてしまうだろう。
俺は死を覚悟した。
――だが、そうはならなかった。

「ガウッ！」
「グワウ！」
「グルルル！」
盗賊頭に襲いかかる三つの影。
「ぐっ⁉　何だ、この狼どもは⁉」
つかず離れず俺達の後をついてきた、あの狼達だ。
男の両足と左腕に噛みつく狼達。
突然の事態に焦る男。
俺はその隙に、盗賊頭の右手を剣で思いきり打ちつけた。
「ぎゃあああ‼」
籠手に阻まれ、骨どころか肉にさえダメージはないだろう。
だが男の手から、剣が失われた。
籠手を叩いて折れた俺の剣の破片が、男の左目に突き刺さったのだ。
「くそ！　くそっ！　くそがあっ！」
男は目から血を流しながら、拳で狼達を殴りつける。
「キャウン！」
「ワウッ！」

「グアッ！」
そのなりふり構わぬ攻撃に狼達はたまらず牙を離し、距離をとった。
煙幕はまだ晴れない。
「畜生！　てめえの顔は死んでも忘れねえぞ！」
盗賊頭は血走った目で俺を睨み、叫ぶ。
俺はその言葉を負け惜しみだと思ってしまった。
なぜなら得物を失ったのはあちらも同じで、狼達の加勢により、今はこちらが優勢なのだ。
あとはうまく牽制して時間を稼ぎ、ダーナさんとペトリさんを待って捕縛すればいい、そう考えていた。
だが盗賊頭は腰から下げた太い筒のようなものを俺に向けて、言った。
「竜砲よ、放て！」
その命令のような口調に、「何かの術具か？」と思った瞬間――。
体全体を、衝撃が襲った。
筒から放たれたものが何なのかはわからない。まったく見えなかった。
感じたのは、空気の塊。
不可視の衝撃に襲われ、俺は抗うこともできず空中に投げ出される。
辺りに広がった白煙を突き抜け、俺は谷間のさらに下の奈落へと落ちていった。

†

冷たい川の急流の中を、流木にしがみついたままどれほど流されただろうか。
ふいに現れた目の前の中洲に運よく大きな岩があり、俺はそこに流木をひっかけて何とか止まることができた。
どうにか岩に上り、必死に空気を肺に取り込む。
とにかく酸素が足りなかった。
「……はあ、はあ、はあ」
息を整えて辺りを見渡す。
すでに夜の帳が下りていて、暗闇の中かろうじてわかったのは、片側が切り立った崖で反対側が森だということだけ。一体どれだけ流されたのか、見当もつかない。
腰に下げていた鞄はなくなっており、薬も、ラスを呼ぶ犬笛も、もがいているうちに落としてしまったらしい。幸い、怪我はほとんどなかったが。
食料もなく、あるのは一本のナイフのみ。
空を見上げると、星のかすかな光すら見えない闇夜が広がっている。
岩の上に仰向けになり、呟く。

「……反省会には、うってつけか……」
目を閉じて、さきほどの戦いを思い出す。
……あの盗賊の男に、手も足も出なかった。
完全に相手のペースにはまってしまった。
執拗に同じ場所を狙い、殺すつもりで剣を向けてきたあの男。
狼達が助けてくれなければ、俺は間違いなく命を落としていた。
男に頭を割られるシーンを想像してしまい、思わず体が震える。
ダーナさん達はあの男を捕縛できただろうか？　それとも逃げられてしまっただろうか？
俺は自分の力不足を痛感した。
確かに父やヴィルホさんには敵わない。だがレイナル領の一般兵との手合わせでは負けなしだった。前世の自分からすれば信じられないほど強くなったという自信もある。だから錯覚していたのだ。自分はそこそこやれる、と。
だが結果はどうだ？　完敗だ。
「油断しなければ……相手の戦法にはまりさえしなければ……」などと言い訳が次々浮かんでくる。
そう、言い訳だ。
今回の任務は、俺にとって初めての実戦だった。
そして普段の訓練と実戦は、まったく別物だったのだ。

本気で命を奪いにくる相手との戦いは、訓練での打ち合いとは違う。たとえ打ち合いで父が殺気を込めて向かってきたとしても、それはあくまで訓練なのだ。本気で命を奪おうとはしないし、俺もそんなことされるはずがない、と理解していた。
わかっている。俺自身の覚悟が足りなかったのだと。本気の戦いというものを知らなかったのだと。
自惚れていた。
命の奪い合いというものを、俺は話に聞いただけでわかったつもりでいたのだ。
「……ははは、井の中の蛙だな、俺は」
乾いた笑いが漏れた。
思い返してみると俺はレイナル領の中だけで得意になっていた。
お山の大将にすぎなかったのだ。
手のひらを虚空へと向け、見つめる。
転生の際に白ひげの神様から授かった他者を強化する能力では、自分を強くすることはできない。
それはわかっている。
この世界に転生してから何度も思った。なぜこの力は、自分自身に対して使うことができないのかと。だがいくら考えてみても、答えは出なかった。
ただ、俺のよき相談相手であるミミ様はかつてこう言っていた。

『あなたが、その力を自分に使えない理由？　……うーん。はっきりとはわからないけど、たぶんあなたに慢心を持たせないためじゃないかしら』

『……慢心、ですか？』

『ええ。自分が人よりも優れているとか、特別な存在だとか……あなたがそんなふうに思わないようにね。あなたの力は、あなたの力であって、あなたの力ではないの。だから、その力で自身を強化しても、それはあなたのためにならない。あなたにその力を与えたお方は、そうお考えになったのではないかしら』

『俺が増長しないようにってことですか』

『ええ。人はどうしても、力を手にするとそうなってしまいがちだから。たとえそれが、借り物の力であっても』

確かにミミ様の言うとおりだ。

慢心。

俺は慢心していた。

……気を引き締めよう。

そして鍛え直そう。

俺は心に誓った。

――木々がざわめき、風が勢いよく吹いた。

体が震える。

さっきとは違う。

これは純粋に、寒さからくる震えだ。

「……うぅっ、寒い……！」

水を吸った衣服は重く冷たく、俺の体温を奪い続けていた。

春とはいえ、夜はまだ肌寒い。しかも今いるのは、冷えきった岩の上。

とにかく今はこの状況から脱しなければならない。

とりあえず衣服を乾かさないとな。

俺は身に着けていたものをすべて脱ぎ、目の前に広げた。

岩の上は畳一畳ほどのスペースがある。

脱いだ服を前に、俺は全裸であぐらをかき、腕を組んだ。

「まずは、衣類の乾燥だな。……湿度を下げれば早く乾くかな？」

そう考えた俺は周囲に結界を張って空気を遮断し、そのうえで結界内の湿気を外に逃がして衣類を乾かすことにした。酸欠になってはいけないので、小さな通気口を用意するのも忘れない。

風の術を応用して結界の中をカラカラにする勢いで湿気を外に逃がしていると、次第に髪の毛が乾いていった。外からの空気をほぼ遮断しているので冷たい夜風を受けることもなく、寒さもある程度解消された気がした。

そして一時間ほど経っただろうか。
「うん、だいぶ乾いたな」
革の装備品はまだかかりそうだが、布製の肌着などはあらかた乾いたので再度身につけた。
温かい。
体を包む温(ぬく)みに安心したのか、ふいに眠気を覚えてそのまま仰向けになった。次の瞬間には、もう意識が遠のいていくのがわかった。

目を覚ますと辺りは明るかった。
空にはすでに日が昇り、暖かな日の光を感じることができる。
俺は川の水で顔を洗い、喉(のど)を潤(うるお)し、寝ぼけ眼(まなこ)で辺りを見回した。
改めて崖を見ると、数十メートルの高さがある。ところどころ木が生えたりしていて、場所によっては登れないこともなさそうだ。だが手前の川幅が広く、深さもあるようで渡れるとは思えない。
逆側は、森の手前に川原が広がっている。
川の流れは速いものの、俺がいる岩と川原の間には大小いくつかの岩が水面から顔を出しており、それらを飛び移っていけばどうにか川原までたどり着けそうだ。
「とりあえず川原まで行って……何か食べ物を見つけないとな」

何度か屈伸して体をほぐしたあと、滑りやすい岩を慎重に渡って川原へ下りた。
そこで俺は妙なものを目にする。
「あれは……何だ？」
木の陰に横たわる、薄汚れた緑色の物体。
それは傷つき、今にも死んでしまいそうな一匹のゴブリンだった。

第二章

ナイフを手に、横向きに倒れているゴブリンに慎重に近づいた。
見たところ瀕死のようだが、それが罠で、俺がそばまで行った途端襲いかかってくるかもしれないからだ。
だが手が届く距離まで寄ってみても、ゴブリンはピクリとも動かなかった。
少し警戒を解いて前に回り込んでみるが、やはり動きはない。目を閉じ、口を半開きにして浅い呼吸をしているのがわかる。
緑色の肌にはところどころ痣があり、赤い血が滲んでいた。
背中を丸め、手で腹を押さえて横になっている。
顔に苦痛の色は見えない。おそらく表情を作る力さえ残っていないのだろう。
俺はしゃがみこんで手を伸ばし、恐る恐るゴブリンの肌に触れる。
温かかった。
人間に比べると少し冷たい気がするが、それはこのゴブリンが瀕死だからか、もしくはそもそも低体温の種族なのだろう。
だがこのゴブリンは確かにまだ生きている。
手を触れても身動き一つしなかったため、俺は右手のナイフを鞘に収め、ゴブリンを仰向けにさせた。
ゴブリンは小さく呻いたが、目を開けることも、抵抗することもなかった。
腹を押さえている手を、そっとどける。
「……これは、ひどいな」
ゴブリンの腹に木の枝が突き刺さっていたのだ。
血は止まっているようだが、その傷はあまりに痛々しかった。
「……かわいそうにな」
自然とゴブリンの頭を撫でていた。
申し訳程度に生えている頭髪は柔らかい。
こいつは、もう間もなく死ぬ。
助けるべきだろうか。
人間や他の種族が目に入れば、見境なく襲いかかる凶暴な生き物――ゴブリンを。
実際に俺も、ダオスタからレイナル領へ引っ越してくる道中に、襲撃されたことがあった。
――でも。

葛藤は一瞬だった。
俺はナイフを抜き、ゴブリンを見つめる。
『――信じるとおりに進むがよい』
城の霊達を救った後に見た夢の中で聞いた、白ひげの神様の声が聞こえた気がした。
自分の服の袖をナイフで裂き、その布を即席のタオルにする。
「……さて、と」
ゴブリンの腹に突き刺さった枝に手を添え、深く息を吸い込む。
「きばれよ！」
俺は枝を一息で引き抜き、傷口から流れ出る赤い血を布で押さえ、回復術を施した。
生命力が少しでも強くなるようにと、俺の能力も使いながら。

三十分ほど経っただろうか。
回復術が効いたのか、それとも能力が作用したのか、ゴブリンの回復は早かった。
腹から流れ出る血はみるみるうちに止まり、体の痣も赤みが引いた。
呼吸も強くなってきたし、心なしか顔色もよくなっているようだ。
「……ふう」
大丈夫そうだな。これならきっと助かる。

安堵してゴブリンから手を離す。
その時だった。
「……ギャギャギャギャギャ……ギャヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ！」
突然痙攣し、口から白い泡を噴くゴブリン。
白目を剥き、歯を食いしばるその様子は尋常ではない。
え!?　何だ!?
俺、何かしたか!?
回復術や能力を使った相手がこんな反応をするのは初めてで、あまりのことに一瞬思考が停止してしまった俺だったが、すぐに気を持ち直し、回復術を再開する。
このまま続けてもよくなるかわからないが、何もやらないよりはマシだろう。
痙攣を続けるゴブリンの腹と胸に手を強く当てて、回復術を、能力を、注ぐ。
「せっかく傷が治ったんだ、このまま死ぬなんてやめてくれよ!?」
目の前で弱っていく命を放っておけなかった。助けたかった。
その思いが通じたのか、次第に痙攣は収まっていった。
さきほどの状態が嘘のように、ゴブリンは穏やかな息遣いになって、目を瞑っている。
「こ、今度こそ何もないよな……？」
俺は恐る恐る手を離し、ゴブリンに変化がないかしばらく見守った。

幸いゴブリンは静かに眠ったままだった。
安心した俺は、立ち上がって川へと向かった。
少しふらつきながら水際まで行き、川の水で手を洗う。
「ふー、疲れたー……」
そこに腰を下ろして休んでいると、流れの速い、透きとおった川の中に魚が泳いでいるのが一瞬見えた。こんな急流でも、やっぱり魚はいるんだな。
「あー、そういえば食料も調達しないといけなかった……」
朝から何も食べていなかったのだ。
食べ物は森で何かしら調達すればいいだろうと思っていたのだが、魚の姿を見たら途端に腹が減ってきて、我慢できなくなった。
「あのゴブリンも食うだろうしなあ。……仕方ない、やるか」
俺は疲れた体に鞭打ち、魚を捕まえるべく、対象を閉じ込める小さな結界を川の中に展開する。
元ダオスタ宮廷法術師の母や、結界術の得意なラスならもっと広範囲でしかも強固な結界を張れるのだが、俺はそこまでできないし、疲労のたまった今の状態ではこのサイズが限界だ。
というか、同じ時期に修業を始めたはずなのに、ラスのほうが結界術の体得が早かったんだよな……。
俺はそんなことを思い出してへこみつつ、なんとか魚を五匹捕まえ、森の手前で枯れ枝を拾ってゴブリンの寝ている場所へと戻った。

食欲をそそる香ばしい匂いが辺りに漂う。
捕まえた魚は大きかった。
脂も乗っていて、時折それが火に垂れてはジュッと音を立てる。
魚がいい具合に焼けてきた頃、ゴブリンが目を覚ました。
無言のままむっくり上半身を起こし、視線をさまよわせている。
俺を見つけると、子供のようにキョトンとした目で見つめてきた。
無言で見つめ合う俺達。
なぜか、俺はこのゴブリンが襲いかかってくることはないだろうと思った。
……このゴブリンは普通のゴブリンとは違う気がする。
以前、ダオスタの街からレイナル領に引っ越してくる途中に襲ってきたゴブリンは、もっとこう、凶暴だった。生き物を見かけたら襲わずにはいられないという感じの。
彼らからは理性や知性なんてものはおよそ感じられず、俺はゴブリンという生物は「人間にちょっとだけ姿の似ているケダモノ」ぐらいに思っていた。
だがこのゴブリンはどうだろう？
俺の能力が面白い方向に働いたのだろうか？

俺達はしばらくのあいだ見つめ合っていたのだが――。
「……オマエ、ナンダ？」
驚いた。
ゴブリンが、言葉を喋った。
発音が怪しく聞き取りづらかったが、それは確かに、人間の言葉だった。
驚きのために一瞬遅れてから、俺は答えた。
「俺は、アラン」
「……アラン？　オマエ、アラン？」
「そう、アラン」
自分を指さして名前を伝えると、彼はそれを理解した。
だがすぐに切なそうな顔になった。
「アラン、タノミ、アル……」
「？」
ゴブリンは腹を押さえ、あるものを指す。
「ソレ、クイタイ。……ハラペコ」
目の前にある魚を食いたい、と。
俺が頷くと、ゴブリンはあっという間に四匹平らげた。

しかし足りなかったのか、俺の食べた魚の、残っている骨と頭まで物欲しそうに見ている。「これも食べる？」と聞いたら大喜びして、きれいさっぱり完食した。
「えーと、お前……君の名前は？」
「……ナマエ？　ナンダ？」
ゴブリンには名前がなかった。
別にないままでもいいのだろうが、せっかく助けて、愛着も感じている俺はこのゴブリンを「君」とか「お前」じゃなくて、名前で呼びたかった。
そこで俺はゴブリンに「グイ」と名づけることにした。とくにこれといった理由はない。直感である。
するとグイはまた大喜びして、俺を残して森のほうへ駆けていった。
「アラン！　コレタベル！」
すぐに戻ってきたグイが、何か差し出して言った。
「これって……木の芽？」
「ソウ！　ヤワクテ、ウマイ！」
「へー」
木の芽を一つ手にとり、焚火で軽く炙ってから口に入れる。

少し青臭いが、なかなか食べられる味だった。
「……これ、天ぷらにでもしたらうまそうだなあ」
「テンプラ？　ナンダ？」
「そういう料理だよ」
「リョウリ？　ナンダ？」
「えーと、料理っていうのは、食べ物をもっとおいしくする魔法みたいなものだよ」
「マホー！　リョウリ、マホーカ!?　マホーはスゴイ！　グイ、マホーシリタイ！」
「魔法に興味あるのか……よし、無事家に帰れたら教えてあげるよ」
「ウン！　グイ、アランとイエカエル！　グイ、アラントイッショ！」
嬉しそうに俺の周りをピョンピョン跳ねるグイ。
その純粋な喜びように思わず俺も目を細めて笑った。
その後俺達は焚火で暖をとりながら、いろんな話をした。
小柄なゴブリンとはいえ、俺の腰より少し高いぐらいの背丈なのでそれなりの年齢かと思っていたが、まだ生まれて半年も経っていないらしい。
ゴブリンという種族は成長が速いのだろう。
それからグイは俺を置いて、また森に入っていった。
「アラン、コレモタベレル！」

戻ってきたグイの手にはどっさりと食べ物が。
かなりの量だ。
すごく助かる。感謝するよ。グイ、ありがとう。
だけど、だけどさ。
「アラン！　コレウマイ！　タベル！」
グイが薦めてくるのは、土にまみれた、柔らかそうに動く白いものや細長い緑色のもの。
他にも、黒光りした硬そうなやつや、羽のある赤っぽいやつ。
それらがうねうねわさわさと、グイの手の中から逃げようともがいている。
「……それ、俺はいらないぞ」
「ナンデダ？　ウマイゾ？　チカラデルゾ」
「俺はいいから、グイが食べなよ」
むしろ食べてください。俺に見えないところで。
さすがに。
さすがに虫はハードル高いと思うんだ、俺。

†

俺達は川原を上流に向かって歩いていた。
遭難した時に川を下るのはよくないってどこかで聞いたことがあるし、川を上っていけば少なくとも俺が落ちた場所までは戻れるはずだ。
お腹いっぱいで上機嫌なのか、弾むような足取りで俺の横を歩くグイ。
グイを見て思う。
他のゴブリンもグイと同じように、人間と意思疎通できるのか、それともグイが特別なのか。
俺の能力でそうなったのか、もしそうなら、グイは仲間のもとに帰れるのか。……でも、帰してしまって、その群れが人を襲ったら、グイまで討伐されてしまうかもしれない……。
ふと起こった心のもやもやは、どんなに考えてみても晴れない。
十年前、ダオスタ近くの森で出会ったラスを家に連れて帰る時は、こんなに悩まなかったんだが……。狼のラスと違い、グイがゴブリンだからだろうか。ゴブリンは人間に嫌われているからな。
でも、狼だって群れを作るし、人を襲う。度合は違っても、人にとって脅威である点は変わらないはずだ。
にもかかわらず、狼に比べてゴブリンはひどい嫌われようだ。
どうしてなのだろう？
そう考えた時、ふと思い当たることがあった。
ゴブリンが忌み嫌われるのは――。

人間の女性を攫い、自分の子供を生ませるからではないか。
ゴブリンには雌がいない。
そのため彼らは種族内だけでは繁殖することができない。他種族の雌に子を生んでもらうしかないのだ。
だからゴブリンは人を襲う。自らの子孫を残すために。
そしてゴブリンは醜い。
これがトー――俺が前に精霊樹の森で出会った小人族のトリス――みたいな、ほとんど人間と同じ容姿をしていたら違ったのかもしれないが。
「なあ、グイ」
「ナンダ、アラン」
「グイは、やっぱり雄なのか？」
わかりきってはいたが、なんとなく聞いてみた。
すると思ってもみない答えが返ってきた。
「グイ、オス、ナイ。メス、ナイ」
「え？」
雄でも雌でもない？
「え？　じゃあ子供はどうやって作るんだ？」

「グイチガウ、オトナ、オス、ナル。グイ、マダオス、ナイ」
えーと、グイは大人ではないから、雄でも雌でもないということか？
ということは、子供のグイにはまだ性別がないってこと？
でも、ゴブリンは男性種族だって言われているよな？
人間と同じで、子供のうちは生殖能力がないってことでいいのだろうか？
……まさかあの腰蓑（みの）の下を見せてもらうわけにもいかないし……そういうことにしておこう。

日が暮れて、辺りは夕闇に包まれている。
焚火をおこして昼間集めた食料を炙って食べる。俺はもちろん虫以外を。
グイは火を怖がらず、あぐらをかいた俺の膝に座って無邪気に食事している。
ちなみに一般的にゴブリンは臭いと言われるが、グイはそんなこともなかった。
それにしても、今朝出会った時よりも顔つきが穏やかになって、なんとなくだが愛嬌（あいきょう）も出てきた気がする。
……でも、相手はゴブリンだぞ。
目の錯覚だろうか？
「アラン、グイ、ウレシイ」
グイは俺を見上げてそんなことを言う。

グイの好意が伝わってくる。命を救ったからなのか、それとも焼き魚をあげたからなのかわからないが、悪い気はしない。
俺が「そっか、それはよかったな」と頭を撫でてやると、グイは「ウン！」と嬉しそうに頷いた。

翌朝。
目が覚めると、グイが俺の胸に抱きついて眠っていた。
ゴブリンに抱きつかれるのもなあ……と朝から微妙な気持ちになっていると、グイも目を覚ました。
「……アラン、オハヨ」
「あ、ああ。……おはよう、グイ」
上目遣いに俺を見るグイ。
俺は固まった。
……なぜだ。
なぜグイが可愛く見えるんだ。
……ゴブリンだぞ？
……グイはゴブリンなんだぞ!?
「……グイ、なんか、可愛くなってないか……？」

「……？　アラン、ナニカイッタ？」
「……いや、何でもない」
俺は頭を振って、何かの間違いだと思うことにした。
その日も俺達は連れだって川沿いを遡る。
途中、俺と同じように落下したと思われる盗賊の遺体があったので、グイと森の中に埋葬した。
一歩間違えば俺もこの盗賊のように命を落としていたかもしれない。
自分の幸運に感謝しながら、俺はこの盗賊の魂が現世に留まることがないよう祈った。
盗賊は厚手のマントとナイフを身に着けていたので、それを拝借することにした。
マントは川で洗ってから、頭を通せるくらいの穴を空け、それをグイにすっぽり被せる。そして腰のところをひもで縛り、簡単な貫頭衣にした。
靴も作ってあげられればよかったのだが、盗賊の履いていた革のブーツはグイには大きすぎた。
俺がやっていることを終始不思議そうな目で見ていたグイだったが、服を着せてナイフを渡すと「アリガトウ！」と大きな声でお礼を言い、その笑顔がまたやけに可愛く見えてしまう。
誤魔化すようにグイの頭を撫で、俺は足早に歩き出した。
その夜もグイは俺の膝の上で食事をし、俺の胸に抱きついて眠った。

三日目。

「おはよ、アラン」
目を覚ますと、昨日と同じように胸にしがみついているグイが目に入る。
「どうした？　アラン」
目頭を押さえて悩んでいるとグイが声をかけてくるが、返事ができない。
待て。
待て待て待て……！
念のため目を開けて前を見る。
そこには上目遣いでこちらを見つめるグイ。
……そう、グイだ。
グイはゴブリンだ。
ゴブリンはグイだ。
何かがおかしい。
……なんでだ!?
なんで、昨日よりもさらにグイが可愛く見えるんだ!?
……何か変なものでも食べたか？
確かにグイの拾ってきたキノコなんかも食べてはいるが、それは俺も知っている種類のもので、毒キノコではない。

……ハッ！
もしかして、ここいらの森にはあれとそっくりの、幻覚症状を引き起こす毒キノコが生えているのかも!?
俺はそれを食べてしまったのかもしれない。
……そうだ、それ以外に考えられない。
よし！　あのキノコは絶対に食べないようにしよう。
そう心に決めて、俺は歩き出す。
グイもついてくるが、昨日と違い俺の服の裾をちょこんと掴(つか)んで放そうとしない。
「アラン、どうした?」
振り返った俺に声をかけるグイ。
くそっ！　声まで可愛らしく思えてきた。
俺はそんなグイをできるだけ見ないようにして、足を前に進めた。
しばらく川沿いを進み、休憩がてら足を止めて川向こうの崖を見上げてみると、崖から生えた木に引っかかっている遺体が目に入った。
身なりからあの盗賊の一人だと思われた。
「ということは……俺が落ちたのはこの辺りか」
ようやくスタート地点まで戻ってこられた。

あとは川を渡って、あの崖を登ればいいのだが。
「ちょっと難しいな……」
川は下流よりもさらに流れが速く、深さもどれほどあるかわからない。渡るのは危険すぎるだろう。
「……もう少し、上流へ行くしかないか」
俺達はまた歩き出した。

四日目。
俺は昨日キノコを食べていない。
食べていないったら食べていない。
……なのになぜだ?
「アラン、どうした?　グイのかおに、なにかついてるか?」
なぜ……。
なぜグイが……。
可愛らしい女の子に見えるんだ!?
これはあれか、キノコではなく変な草を食べたからか。
そうに違いない！

やられた。
毒キノコではなく、毒草のせいだったとは……！
目を覚ましてから今まで、何度も目をこすり何度も見返しているが、何も変わらない。
サラサラの茶色い髪は顎のあたりまで伸びており、手足もふっくらしている。
目は大きく、ルビーのように赤い。
子供だからなのか鼻はそこまで高くないが、縦にスッと伸びたいい形をしている。
小さめの口の下唇からちょこんと牙が覗いているのが、なんともチャーミングだ。
肌は白に近い、薄い緑色。
女の子は俺がグイのために作った貫頭衣を着ている。そして俺がグイにあげたナイフを腰に下げている。
俺は茫然と呟く。
「……グイ、なのか？」
「アラン、何を言ってる？　グイはグイだぞ」
何だか、言葉も聞き取りやすくなったような……。
俺はあまりの驚きに、すっかり忘れていた。
周囲に索敵の術を展開することを。
「……！　……ラン様ー！　アラン様ー！」

「ぐるる！」
「がう！　わう！」
「ウオン！」
突然森の奥から、俺を呼ぶ声と狼の鳴き声が聞こえた。
そして森から飛び出してきたのは、つい先日まで寝食を共にした仲間達。
「アラン様！」
それはペトリさんをはじめとする数名の別働隊隊員と、三匹の狼だった。

†

「ご無事で何よりです。……ところでアラン様、その子は？」
駆けつけてきた彼らに驚いて咄嗟に俺の後ろに隠れた、グイと思われる女の子を指してペトリさんが聞いた。
俺は逆に聞き返す。
「ペトリさん。この子をどう思う？」
「え？　はあ。どうって……。すごく……可愛いです」
……これで決まりか。

立ち読みサンプル
はここまで

今見えている姿は俺の目の錯覚なんかじゃない。
変なものを食べたわけではなかったんだ。ちょっと安心した。
だが、それはつまり——この女の子はグイということだ。
心当たりは俺の能力しかないんだが……それにしても、可愛らしい女の子になったな。
そんなグイを見て、ペトリさんがまた聞いてくる。
「それで、アラン様。この子は一体？」
「保護したんだ」
「え？」
「森で怪我をしていたから保護した。それだけだよ」
嘘は言っていない。
俺の言葉に、「……こんな小さな子が、なんで一人で山奥に？」とか、「……親はどうしたんでしょう？」とかいう隊員達の声が聞こえてくる。
「実はゴブリンなんだ」なんて言ったら、めんどくさいことになるのは目に見えている。
「ちょっといいかな」
俺はペトリさんの後ろに待機している猫人の一人に話しかける。
「はい、何でしょうか？」
「うん。頼みがあるんだけど、この子の体を、川で洗ってやってくれないかな？」